



|                  |                                                                                                           |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 今村薫編『中央アジア牧畜社会 -人・動物・交錯・移動-』京都：京都大学学術出版会，2023年，254頁．<br>今村薫編『ラクダ、苛烈な自然で人と生きる -進化、生態、共生-』東京：風響社，2023年，223頁 |
| Author(s)        | 野田， 仁                                                                                                     |
| Citation         | 日本中央アジア学会報， 19， 86-88                                                                                     |
| Issue Date       | 2023-07-31                                                                                                |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/jacas.19.86">https://doi.org/10.14943/jacas.19.86</a>                   |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/94163">https://hdl.handle.net/2115/94163</a>                         |
| Type             | journal article                                                                                           |
| File Information | JB19_018noda.pdf                                                                                          |



新刊紹介

今村薫編『中央アジア牧畜社会——人・動物・交錯・移動——』

京都：京都大学学術出版会、2023年、254頁

今村薫編『ラクダ、苛烈な自然で人と生きる——進化、生態、共生——』

東京：風響社、2023年、223頁

野田 仁

本稿は、2023年3月に刊行された2冊の中央ユーラシアの牧畜に関する書籍を紹介することを目的としている。まずそれぞれの書誌情報・章立て・著者を以下に示しておく。

①『中央アジア牧畜社会——人・動物・交錯・移動——』

序 中央アジアにおける家畜化の歴史生態学的展開 [今村薫]

【概説】DNAからみた中央ユーラシアにおける人間の移動 [斎藤成也]

第Ⅰ部 人-動物関係の歴史的展開

第1章 天山山脈の最初の牧畜民 [久米正吾・新井才二]

第2章 ラクダと都市が支えた草原の移動——18～19世紀の中央アジアとロシア——  
[塩谷哲史]

第3章 カザフスタンにおける家畜ラクダ2種とそれらのハイブリッド作出 [今村薫]

第4章 中国人民公社期におけるラクダ飼養——内モンゴル自治区エゼネー旗の事例から——  
[児玉香菜子]

第Ⅱ部 技術からみた人-動物関係

第5章 ラクダの去勢——中国内モンゴル自治区アラシャー右旗の事例から—— [ソロ  
ンガ]

第6章 山地環境下における牧畜と季節移動——21世紀モンゴル国カザフ牧畜民を事例  
として—— [廣田千恵子]

第Ⅲ部 環境問題と牧畜

第7章 アラル海災害からの「復興」における牧畜の役割——小アラル海地域社会の災害  
適応とレジリエンス—— [地田徹朗]

第8章 乾燥・半乾燥地における人と家畜 [星野仏方]

## ②『ラクダ、苛烈な自然で人と生きる——進化、生態、共生——』

総説：人とラクダ

第1章 ラクダ科動物の進化と人間による利用 [今村薫]

第2章 東アフリカのラクダ牧畜民 [曾我亨]

第3章 ラクダ牧畜の現在——中国内モンゴル自治区エゼネー旗の事例から—— [児玉香菜子]

第4章 ラクダの識別と紛失ラクダの搜索 [ソロンガ]

生物としてのラクダ

第5章 ラクダの分類と個体識別——内モンゴルの例から—— [ソロンガ]

第6章 遺伝子から探る——ヒトコブラクダとフタコブラクダの雑種—— [川本芳]

家畜としてのラクダ・多彩な利用

第7章 ラクダの調教 [ソロンガ]

第8章 牧畜民の暮らしを支えるラクダ毛——モンゴル国カザフ人の事例から—— [廣田千恵子]

第9章 フタコブラクダでの移動と運搬——モンゴルのカザフ人の例から—— [今村薫]

第10章 トルコのラクダ相撲——馱獣からレスラーへ—— [今村薫・田村うらら]

ラクダの環境問題・未来

第11章 ラクダの食習性とキャメルラインの形成——ラクダの環境適応と環境破壊—— [星野仏方・多仁健人]

①・②ともに編者となっている今村薫は、アフリカをフィールドとする生態人類学者であり、これら2冊は、中央ユーラシア研究者も交えて組織された2つの科研費プロジェクト(「中央アジアにおける大型家畜利用の再評価」「中央アジアにおける牧畜社会の動態分析」)の成果物である。メンバーを見ると、学際的な共同研究と呼ぶべき多彩な顔ぶれで構成され、その成果を形にするという共同研究プロジェクトのあるべき姿を体現しているように思われた。なお、②の「はじめに」が、出版社ウェブサイト(<http://www.fukyo.co.jp/book/b624905.html>)に掲載されているほか、関連して編者が作成している成果報告(中央アジア牧畜社会研究叢書)について、編者のウェブサイトから参照できる(<https://k-imamura.com/PSCA/asia/houkoku20>)。

内容として完全に双方が独立しているわけではなく、重複する著者もあり、一部重なる内容も持つ。②がラクダに特化していることはタイトルが示す通りだが、①においてもラクダはそれなりに比重を持つ。地域の広がりとしては、内外のモンゴルを含む一方で、メンバーの都合上、中東・アラブについての章はなく、比較の対象として考察が入ると良かったのではないか。

ラクダを中心とする家畜の利用方法の違いを、さらに地域を横断することによって差異を

浮かび上がらせる点は特筆すべきである。ラクダについて言えば、駄獣としての姿はもちろんのこと、食用(肉・乳)、毛の利用、相撲や戦争への従事もトピックになっている。さらに、家畜をコントロールする技術にも論は及ぶ。ここには去勢や交配なども含まれる。

内容は多岐にわたるのだが、双方を通読して、筆者が大きな関心を持ったのは、「ハイブリッド作出」(①3章)である。単に自分の勉強不足に起因するだけなのだが、ヒトコブのラクダと中央アジアでよくみられるフタコブのラクダを掛け合わせるによりパワーのある次世代が生まれるとは考えてもみなかった。それが近代の産物ということではなく古来より改良が加えられてきた知恵・技術である点も実に興味深い。

以上の概観を踏まえ、かつ紹介者自身の関心に引きずられつつも、双方の内容に踏み込みたい。

まず①について。考古学的な考察が入ることで、長期の変動をより鮮明にすることができているように思われた。言い換えれば、歴史的な流れを入れることで、より大きな視点で環境と向き合っていると言えるかもしれない。第2章が示す交易や戦争に使われるラクダについて、賃料でカウントされるラクダは、あくまで一時的に「利用」されるにすぎない存在で、自らが育て使役する牧畜とは対極にあるという印象を持った。第7章が論じた災害からの復興において牧畜が果たしうる役割については、国家のコントロールという意味では、現代中国における生産調整・過放牧の問題(第8章)と共通の課題を扱っているのかもしれない。この点について、①4章に加え、②3章・同11章もあわせて参照すべきだろう。

②については、ラクダのさまざまな用途がキーになっており、そのすぐれた体質が前提となっている。当然、各地域でラクダの扱い方は異なっていることも再確認できる。第9章が西部モンゴルのカザフ人のラクダによる荷の運搬を分析する。おなじく垂直方向に移牧を行う新疆北部のカザフ人の運搬との違いが気になるところである。

本誌前号の新刊紹介(坂井弘紀による)も牧畜研究の書籍を取り上げていた。今回の2書と同時期に諫早直人・向井佑介編『馬・車馬・騎馬の考古学——東方ユーラシアの馬文化——』(臨川書店)も刊行されており、牧畜を歴史の変化とともに総合的に研究する機運が高まっていると見ることができるだろうか。さらに言えば、言語学寄りのプロジェクトではあるが、チベットについて『チベット牧畜文化辞典』(<https://nomadic.aa-ken.jp/search/>)の編纂が現在進行中であり、今回取り上げた2書のテーマとも大いに重なることを付記しておく。

※文中のウェブサイトの閲覧日はいずれも2023年9月3日。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)